

相互行為論からみた都市農山漁村交流における地域住民の生活意識

矢部 謙太郎・佐久間 康 富

A Study on the Consciousness of the Rural people in Green-tourism :
from the Standpoint of Interaction

Kentaro YABE and Yasutomi SAKUMA

早稲田大学教育学部 学術研究—地理学・歴史学・社会科学編—
第55号 (2007年2月), 15—28頁 別刷

Reprinted from

GAKUJUTSU KENKYU, SCHOOL OF EDUCATION, WASEDA UNIVERSITY

Series of GEOGRAPHY • HISTORY • SOCIAL SCIENCE, Vol.55, pp.15-28, February, 2007

相互行為論からみた都市農山漁村交流における 地域住民の生活意識

矢 部 謙太郎・佐久間 康 富

1. はじめに

わが国は、2005年12月以降、人口減少社会へ入った¹。多くの農山漁村では、構造的な農林水産業の不振とあいまって、過疎、少子高齢化問題などに起因する担い手不足への解決に長い間取り組んできた。全国総合開発計画（1962年）において地域間格差の是正を目標に掲げ、国土の「均衡ある発展」を目指して展開されてきた工業誘致策などの外来型開発指向の地域振興策は、人口減少の抑止力としては作用してこなかった。現在、これら諸問題への対応の方途は未だ明らかではない。人口減少社会の中で、問題の再設定をする必要に迫られている²。

一方、「交流人口」をキーワードして「定住と交流による地域の活性化」を目標のひとつに掲げた第四次全国総合開発計画³（1987年）以降、都市住民の農山漁村に対する関心の高まりとあいまって、各地で都市農山漁村交流（以下、都市農村交流⁴）が事業化され、グリーン・ツーリズム⁵などを中心に活発に施策が展開している。地域資源を利活用した都市農村交流の展開による、それぞれの地域の自立が期待されている。

都市農村交流に関する一連の研究において、当初は、いかに都市住民に関心を持ってもらえ

るかという観点から、都市住民の視点に立ち都市住民の農山村地域へのニーズ調査を中心とした研究蓄積が見られた。しかし、こうした地域資源を利活用した都市農村交流は、地域住民の日常的な「生活の場」を都市住民の観光の対象とすることであり、「消費される農村」といわれるように多くの地域空間は都市生活者のニーズを敏感に反映した地域住民の内外に存在する「都市のまなざし」（立川、2005）によって再構成されつつある。現在は、こうした都市農村交流の展開が、地域にとってどういう影響があるのかという観点から都市農村交流を検証する段階に来ており、いくつかの研究蓄積も始まっている⁶。本稿はこうした地域住民の側に立ち都市農村交流を検証する一連の研究に位置づけられる。

本稿の構成は以下の通りである。第2章では、都市住民にとっての農村生活の魅力がどこにあるのかを指摘したうえで、その魅力が果たして地域住民にとってありのままの農村生活の特徴なのかどうかを検討する。第3章では、都市住民にとっての農村生活の魅力を維持するために、地域住民がいかなる生活意識をもつようになっているかを明らかにする。第4章では、都市農村交流を通じて確立されるまちのアイデンティ

ティ、地域住民のアイデンティティの特徴とは何かについて考察する。

第2～4章の各章の課題について考察するための理論枠組として、奥村隆の相互行為論を採用したい。奥村の明快で簡潔な相互行為論によって、各章で設定された問いすべてに一貫した回答を与えることができるからである。また、都市農村交流における地域住民の意識の特徴が、居住地域を越えて、現代社会に生きる私たちの意識一般の特徴と通底していることが示唆されるからである。

本稿では特に、早稲田大学後藤春彦研究室で行われた「まちづくりオーラル・ヒストリー」をその分析の対象とする。「まちづくりオーラル・ヒストリー」とは同研究室によって1999年から実践され、「地域で暮らしを営む人々が生活環境や伝統文化などの潜在的な可能性を引き出すことにより、経済的自立性を獲得するとともに、地域社会に立脚した豊かな生活を追及する」（後藤・佐久間・田口，2005：22）まちづくりの一手法として案出されたものである。調査者が被調査者（対象者）に直接対面をして聞き書きしていく手法を経ているため、時代状況に応じた住民の声が子細に記録されているのが特徴である。本稿の目的である都市住民と地域住民との相互関係にみる地域住民の生活意識を明らかにするために、適切な内容であると判断した。いくつかの地域で実施された「まちづくりオーラル・ヒストリー」のうち、特に都市農村交流に関する記述の多い新潟県刈羽郡高柳町（現・柏崎市高柳町）と愛知県東加茂郡足助町（現・豊田市足助町）で実施されたものから、地域住民の生活意識を抽出する。

新潟県柏崎市高柳町は、新潟県のほぼ中央に

位置し、人口2,502人、高齢化率40%（2000年国勢調査・2005年5月に柏崎市に編入合併した）の小さな雪深い農山村である。1989年に県下ワースト1位の人口減少率を記録したことに端を発し、1989年に「ふるさと開発協議会」が一般住民有志によって組織された。以来、2年間で200回もの会合が重ねられ、同町のまちづくりの指針を示す「じょんのびの里づくり構想⁷」がまとめられた。定住地と観光地としての魅力を兼ね備えた「住んでよし、訪れてよし」という基本理念のもと、地域資源の活用、「地産地消」が特色として打ち出された。その後、地域の物産を販売する施設や、地元の食材を使ったレストランと宿泊施設をあわせもつ複合施設「じょんのび村」、ならびに、美しい茅葺き民家を改装した宿泊施設「荻ノ島かやぶきの里」、
「門出かやぶきの里」も建設された。（後藤・佐久間・田口，2005：97-112）

愛知県豊田市足助町は、古くは尾張、三河と信州を結ぶ物流基地、宿場町として栄えた。戦後は製材業、木材、薪炭、竹などの流通基地として活況を呈したが、過疎高齢化の進展、近隣都市への人口流出が続き、1970年「過疎地域」に指定されるに至った。まちの活性化のために、1975年に「足助のまちなみを守る会」が組織され、宿場町をしのばせる街並みの保存運動が進められた。1980年には明治時代の同地域の豪農屋敷をモデルとした「三州足助屋敷」が開館。機織実習施設や売店、伝統的農家を再現新築した母屋、作業場、展示室になっている土蔵、職人の手仕事が見学できる作業小屋が立ち並んでいる。（後藤・佐久間・田口，2005：83-96）

2. 地域住民によって演出される「田舎暮らし」

農村漁村に滞在し地域住民と生活をともにするという観光の形態は、近年、盛んであり、オルタナティブ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムあるいは都市農村交流とも呼ばれている。こうした観光形態は、地元の農山漁村が、都市住民を中心とした観光客にとって何らかの魅力的な生活体験を提供できなければ成り立たない。では、都市農村交流のなかで、観光客は農山漁村の生活体験のいったい何に魅力を感じているのだろうか。端的に言って、その魅力とは以下の三要素から成り立つ「田舎暮らし」である。

- ①まごころ（ひと）：ホスピタリティ⁸（人情、純朴さ）
- ②ならわし（こと）：伝統的慣習（なりわい、祭礼、行事）
- ③たたずまい（もの）：ムラの風景（自然、作物、民家、民具、音風景）

高柳町の門出かやぶき友の会が発行している『かわら版 かやぶきの里』には、高柳町門出で地元の生活を体験した観光客（モニター会員）の声が掲載されている。その声からは、観光客にとって高柳町門出での生活体験の魅力が前述の「田舎暮らし」三要素に他ならないことがわかる。

「勤勉で人懐っこく？素朴で思いやりのある（①：番号は上記「田舎暮らし」三要素を表す。以下同じ）小林さんの風貌は、今でも少しも変わっていない。その風貌は紙を漉く（②③）ときでなく囲炉裏（③）

でふるさとを語るときや餅つき（②③）を披露する時も実に良く似合う」（門出かやぶき友の会、2006）

「高柳のごっつお [料理] について [普段の日常生活では] 一年中野菜はハウスものが出ていて季節がありません。高柳では本当の季節の食べ物（③）が沢山あります。おいしさの決め手は、一、朝と夜の温度差（うまみ、甘さ）、二、取り立ての品物（鮮度）（③）、三、かあちゃん達の愛情のこもった（①）料理、四、品質のよさ、旬のもののおいしさ（③）（子供達に伝えたい）」（同上；[] 内は筆者の補記）

「かやぶきの里の周辺は自然（③）に恵まれている。かやぶき（③）の窓を開けると故郷の絵（③）が出てくる。春はブナ林の芽吹き、夏はホタル飛び交う田んぼ、秋は山々の紅葉、冬は家々を包む真っ白な雪（③）。それぞれ季節の風景（③）がある。その中に、集落の祭りや行事（②）があり、田や畑で働く人（②）、そして生紙工房（②③）もある。この風景（③）を守り続けて欲しい」（同上）

「おねえさまたちが、『今の人は、料理に時間をかけること（①②）を悪いことのように言うけれど、料理に時間をかけないで何にかけるんだろうね。ごっつおに時間をかけるっていいことだて』と話してくれた。この言葉がかみさんの心に強く残ったらしく、この話を何度と聞かされた」（同上）

「七月だったので、蛍の光（③）のショーを楽しみ、かえるの大合唱（③）に自然の豊かさ（③）を感じ、でも何といてもお母さん達が作ってくれる『ごっつお』の美

美味しいこと！ 山菜料理，野菜たっぷりの煮物，鮎の塩焼き（③）…沢山いただいてお腹はふくれているのに，優しい笑顔（①）のお母さんから勧められると，箸はどんどん進んで，エンドレス！ 行った後も二人である時のことを話し，また行きたいと思っていました。昨年，モニター会員になったのをきっかけに，今年の六月までに数回訪れる機会に恵まれました。この数回のうちに四月は残雪の中，桜がきれいに花を咲かせ，五月は雪が消えて（③）田植えが始まり（②③），六月にはその稲の背が伸びてかえるの合唱が始まり（③），とかやぶきの里の時間を感じることができました。都会の人にとって『かやぶきの里』では，都会にないゆったりした時間（①②③）を過ごせます。」（同上）

こうした「都会にないゆったりした時間」を体験できる「田舎暮らし」は，①まごころ（ひと），②ならわし（こと），③たたずまい（もの）の三要素のいずれを欠いても成り立たない。これら三要素が組み合わされてはじめて，観光客にとっての高柳町の「田舎暮らし」の魅力が成立する。

それでは，「田舎暮らし」三要素が観光客にとって大きな魅力であることを，高柳町の地域住民はどれだけ自覚しているのだろうか。高柳町の地域住民の声から探ってみよう。

「交流観光の拠点である『じょんのび村』また，サテライト施設としての門出，荻ノ島集落の『かやぶきの里』がオープン以来，地域内外を問わず反響が良く，たくさんの

人々がやって来て，町は賑わい，まちの景観（③）と人情（①）を礼賛するようなことはかつてなかったことだと思う」（高柳町，2000：76）「…関東の人たちが高柳の自然（③），人情の良さ（①）などを理解してその空き家を買取り，大宮や神奈川の人たちのセカンドハウスにしている」（同上：109）

「田舎の文化（①②③）が売り物になる。高柳は売り方がうまくなってきている」（同上：17）

『『ここ高柳には，都市にはない高柳ならではの生活文化（①②③）があるんだ』ということを学んだ』（同上：77）

「当初は田舎らしさ，田舎臭さを強調していたが，今は都会的になってきていて，そうしないとやっていけないんじゃないかということもあると思う。でも，今でも田舎らしさ（①②③）は強調したほうがいいとは思っている。」（同上：83）

「[かやぶきの里について] ここのテーマは，『田舎の流儀』（①②③）『茅葺の風情にこだわる』（③）『日本の田舎を残す』（①②③）の3つ。…。食事は小皿ではなく，大皿（②）で出す。ここで働く上で3つの条件がある。『普段の感じでたしなみ程度の化粧』（①②③）と『普段着』（①②③）そして『地元の言葉』（①）の3つ。これが田舎の流儀というものだ。」（同上：70）

以上からわかるように，高柳町の地域住民は，「田舎暮らし」三要素が都市住民を中心とする観光客にとって大きな魅力であることをはっきり

りと自覚しており、観光客の「田舎暮らし」への需要に応えようという意識すらもっている。

観光客の望む「田舎暮らし」三要素のうち、②ならわし(伝統的慣習)、③たたずまい(ムラの風景)は、①まごころ(ホスピタリティ)と比べると、観光客に対して安定供給できる観光資源であるといえる。③は「田舎暮らし」のいわばハード面であって、「自然」「民家」のように所与の資源や、いわゆる「ハコモノ」として作られたものなど、「もの」として観光客に安定供給される。②についても、ハードである③を背景に成り立つ「伝統的慣習」「なりわい」「行事」のような「こと」として物象化されている点で、①に比較すると安定している。観光資源である②③の存続、維持によって観光客の需要にこたえているという自覚、さらには、新たな観光資源となる②③を創出、復活させようという意図が、以下の地域住民の声からうかがえる。

「サテライトのかやぶき家 [かやぶきの里] (③) はお客に愛されている。高柳らしさが出ている」(高柳町, 2000: 93)

「子供のころ、そばをばらまき、石臼で引いて食べた (②③)。これがとてもおいしかった。こうしたことを、もっと商売根性出してやって行くべき」(同上: 97)

「これ [三州足助屋敷] (②③) ができた後、みんなの目が変わった。…。確かに初めは古いものをどうしようというんだ、大したこと無いと思った。しかし、独立採算ができ、失われたものを残すという点でいいし、来てくれるお客さんがなにを望んでいるのかわからなかったが、だんだんわかっ

てきた。」(早稲田大学後藤春彦研究室, 1999: 48; [] 内は筆者の補記)

「大工としてはまちなみ (③) 保存にも関わっていきたい。…。他の人に自分の仕事を評価されるのはうれしいし、お客さんも第三者にほめられるとその価値を認識できる。」(同上: 52)

「まちなみ (③) の保存に関しては、10年ぐらい前は本当にやっているのか疑問だったし、行政は残してくれというだけで政策がみえなかったため、『それで、一体残してどうするつもり?』と感じていた。でも、今は現在残ったものをどう利用するか、どう使っていくか考えるのは僕らの仕事であると思っている。いい資源を残してくれて感謝している。」(同上: 63)

では、こうした「こと」「もの」として安定供給される観光資源②③と比べて、「田舎暮らし」三要素のうちでもっとも不安定な観光資源である「①まごころ(ホスピタリティ)」は、いったい地域住民によってどのように維持されているのだろうか。それは、地域住民にとって、手つかずのありのままの特徴なのかそれとも努力によって意識的に観光客に提供される特徴なのか。高柳町および足助町の地域住民のうち観光客と接触する機会の多い以下の人々の声をきいてみよう。

「ここの宿 [かやぶきの里] に泊る人はいろんな人がいるが、ホテルや旅館の感覚で来てもらう人はあまりうまくいかない。ここではおしゃべり (①) がサービスになっていると思うので、言葉は訛り (①)、服

装も地味目なもので、ここにしかないものを使っている。お客さんが喜んでくれるのが何より楽しい。お客さんへのサービスは生きがい」(高柳町, 2000:105; []内は筆者の補記)

「[じよんのび村について] あったかい気持ち(①)をもって、客と話をすること(①)が一番大事」(同上)

「人と人とのつながり(①)ってというのは、大切なこと。…。どんな悪い人でも必ず良いところがあるので、心を開けば通じる(①)もの」(同上:69)

「最近高柳もマンネリ化して、だれてきている。結局は『人の心と情(①)』だと思う。リピーターに増えてもらうためにも、そういうものを大切にしていってほしい。」(同上:82)

「今悩んでいることは、創作することとお客さんとのコミュニケーション(①)とのバランス。ただ黙々と紙をすいているだけではダメ、自分でどんどんいろんな和紙についての知識を付けていかないとお客さんとも話ができない。はじめのころは口を動かしながら手を動かすのが大変だったのよ。でも話込んでいてもダメ。」(早稲田大学後藤春彦研究室, 1999:49)

これからわかるように、観光客にとって魅力的な観光資源である「まごころ」は、高柳町の地域住民にとって、手つかずのありのままの特徴というよりも、意識的に注意深く演出され観光客に「サービス」として提供されるものである⁹。

以上から、本章の結論として、都市農村交流

において観光客が体験する「田舎暮らし」の魅力の三要素、すなわち、①まごころ(ホスピタリティ)、②ならわし(伝統的慣習)、③たたずまい(ムラの風景)というみっつの観光資源は、地域住民にとってありのままの農村生活の特徴であるというより、むしろ、地域住民の努力によって観光客のまなざしに対し意図的に維持、演出、提供されていることがわかる。観光客に対して「田舎暮らし」を演出する地域住民は、いわば「③たたずまい」という「舞台装置」上で「②ならわし」という「イベント」を通じて「①まごころ」という「サービス」を、観光客という「観客」に提供する「演者」である。

3. 「舞台」と「楽屋」に分離した地域住民の生活意識

では、都市農村交流において、地域住民が観光客のまなざしに対するいわば「演者」としての意識をもつことで、地域住民の生活意識にどのような特徴があらわれているのだろうか。本章では、この問いに回答を与えてみたい。

都市農村交流における、都市住民を中心とした観光客と地域住民とのコミュニケーション(相互行為)とは、それぞれの価値、アイデンティティを互いに承認しあうプロセスであるといえる。地域住民にとって、都市農村交流とは、都市住民にとって高い価値のある「田舎暮らし」の住民というアイデンティティを観光客から承認してもらう場である。また、観光客にとって、都市農村交流とは、「田舎暮らし」の価値とその地域住民のアイデンティティを承認することで、普段の生活では得がたい「田舎暮らし」という希少価値の体験者というアイデンティティを地域住民から承認してもらう場である。ただ

でさえ過疎化の進行や地場産業の衰退によって地域のアイデンティティや誇りを失いつつあった地域住民にとって、都市農村交流が、観光客から地域の「田舎暮らし」の価値を承認してもらうことで、地域住民のアイデンティティへの承認を獲得する貴重な場である。これらは、以下の地域住民の声からわかる。

「交流というのは手段。目的ではない。要は住んでいる人が、ここに住んでよかったなあと心から思えること。そのために都市との交流は不可欠。かやぶき家でスタッフが都会の人と話して、都会の精神的貧しさ、生活的貧しさを再認識することによって、ここも捨てたもんじゃないという意識が芽生えている。客観的に自分達を知ることが始まる」(高柳町, 2000: 63)

「昔は高柳出身と言えず、柏崎出身と言ったりしたが、じょんのびでとてもよかったのは、今の子供達が出身地を『じょんのびの高柳です』と言えること」(同上: 63)

「どういうところがいいのかっていうのを、外から評価して欲しい。自分達ではあまりわからないから」(同上: 75)

「東京の人にも『足助』が知られるようになり、変なプライドもしくは誇りが生まれた。町民全体の意識にもなる」(早稲田大学後藤春彦研究室, 1999: 52)

ここで、奥村隆の相互行為論(奥村, 1998)を参照したい。奥村は主にゴフマンの相互行為論を基礎としながら、以下のような独自の相互行為論を提示している。奥村によれば、私たちは自らの存在を証明するために、すなわち、自

らの価値、アイデンティティを確認するために、必ず他者からの承認を必要とする。他者から承認されることなく、ひとりで自らの存在を証明することはできない。たとえば、「優しい人間」としての自己を存在証明したいとき、他者から「優しい人間」と承認されない限り、その存在証明は成功しない。ところが、当然のこと、自らとは別個の意志をもった主体である他者から、望みどおりの承認を得られるとは限らず、むしろ否認される可能性すらある。したがって、他者とのコミュニケーション(相互行為)において他者からの承認(存在証明)を獲得しようとする試みは、原理的にいえば、成功の保証のない<賭け>であって、その試みには、承認の獲得しがたさという「稀少性」、承認獲得に失敗し自らのアイデンティティが危機に陥るかもしれないという「危険性」の問題が常にともなう(奥村, 1998: 32-48)。

他者からの承認をめぐる相互行為のこのような「稀少性」「危険性」をなるべく最小限にし、私の存在証明を確保するために、私たちは「思いやり」という技法を行使していると奥村はいう。すなわち、相手の望みどおりに相手を承認するという「思いやり」をわざわざ相手に示すことによって、こちらの望みどおりの自己を他者から承認してもらうという「思いやり」を相手から引き出すというやり方で、私たちは安全な形で互いに「存在証明」をあらかじめあつらえることができる。こうした「思いやりの技法」の行使のなかで、私たちは、互いの互いに対する真の評価を自己規制し、また「思いやり」の相互あつらえに協力しない人を排除しようと相互監視する。このようなやり方でいわば「思いやりの領域」が維持される限り、私たちの存在

証明は確実に達成される（奥村，1998：32-48）。

都市農村交流のなかで地域住民が、価値ある「田舎暮らし」の住民というアイデンティティへの承認を都市住民を中心とした観光客から獲得することは、奥村のいうとおりに原理的にみれば、常に成功するとは限らない〈賭け〉であり「稀少性」「危険性」という問題がともなう。しかし、〈賭け〉という性質を低減し「稀少性」「危険性」を最小限にするために、言い換えれば、観光客からの承認を安定的に獲得するために、地域住民は、観光客が望む「田舎暮らし」体験者という稀少なアイデンティティを与えようとし、そのために観光客の期待を外さないよう「田舎暮らし」を「あらかじめあつらえる」ことで効果的に演出し提供しようとしている。「田舎暮らし」を「あらかじめあつらえる」努力には、前章で指摘したような地域住民の努力のほか、地域住民間の「相互監視」も含まれる。「田舎暮らし」の一要素である「まごころ」を観光客に対して「サービス」として演出することは、地域住民の誰にでも簡単にできることではないし、誰もがその必要性を感じているわけでもない。「まごころ」演出の巧拙の差、「まごころ」演出の必要性の自覚の有無の違いが、地域住民のあいだに見られるようである。「まごころ」演出の稚拙な人々、「まごころ」演出の自覚のない人を「相互監視」によって非難する高柳町の地域住民の声が以下のようにみられる。

「じよんのび [じよんのび村] はもっと好かれるようになって欲しい。従業員に気を使うより、お客さんに笑ってあげる (①) 方が当然だと思う。自分が正しい訳ではな

いけど、従業員同士で気を使うのはね……。』
（同上：128）

「じよんのび村は裏方がじよんのび [のんびり] し過ぎた。お客さんが来てから慌てて迎えるんじゃないくて、やることやって準備してからお茶飲んで、すぐお客さんに対応すればいいんだけどね。笑顔で接客 (①) をしなきゃいけないのに、人見知りだから苦手っていうのは理由にならないしね。」（同上：128；[] 内は筆者の補記）

「じよんのび [じよんのび村] で働いている人については、役場の天下りが多く、商売に対しての社員教育が必要。どうしてもサラリーマンにみえるのが現実。経営的にみれば厳しいわけだし、残業するなということもあるらしいが、そういったことが顔にも出ている。その辺りの教育をすれば、また違ったお客も増えると思う」（同上：118）

このような地域住民間の「相互監視」によって「田舎暮らし」を「あらかじめあつらえる」という「思いやり」が、地域住民によって行使されていることがわかる。

奥村によれば、しかしながら、このように「思いやりの技法」によって「存在証明」があらかじめあつらえられることで他者からの承認が容易に獲得できるようになると、今度は「存在証明のインフレ」（承認の価値の下落）が起こり、別の問題が生じる。それは、他者からの承認に嘘くささがともなうという「虚偽性」、存在証明の確信が薄れるという「希薄性」の問題である。しかしながら、これらの問題を解消しようとしてその場で本心を言ってしまうと、

「思いやりの領域」が崩壊し、存在証明は達成されなくなる。「思いやりの領域」を侵害することなく「虚偽性」「希薄性」を解消するために、本当のことを言い合える領域として「かげぐちの領域」が案出される。したがって、「存在証明」があらかじめあつらえられる「思いやりの領域」を維持するためには、むしろ「かげぐちの領域」が必要とされる。いわば「舞台」としての「思いやりの領域」と、「楽屋」としての「かげぐちの領域」は、コインの裏表のように不可分でありながら互いに排除されている(奥村, 1998: 48-60)。

都市農村交流において「田舎暮らし」を「あらかじめあつらえる」という「思いやり」を行使することに、当然、嘘くささを感じる地域住民がいてもおかしくはない。「田舎暮らし」の住民というアイデンティティの獲得とひきかえに生じる問題、すなわち、「田舎暮らし」を「あらかじめあつらえる」ことの「虚偽性」、それによって得られる他者からの承認の「希薄性」という問題を、地域住民はどのように解消しているのだろうか。

都市住民を中心とする観光客とのコミュニケーション(相互行為)において「虚偽性」「希薄性」という問題に言及することはできない。たとえば「求められているのはわかっているけど、素朴さを装うのも疲れるんだよね」といった本心を、地域住民が観光客の前で吐露することは危険である。そうすることで観光客にとって魅力的な「田舎暮らし」が崩壊し、観光客から地域の「田舎暮らし」の価値を承認してもらう場、地域住民のアイデンティティを獲得する貴重な場としての都市農村交流の意義が消失してしまうからである。したがって、地域住民は、自ら

の本心を吐露する領域を、観光客との相互行為(コミュニケーション)とは別の領域、都市農村交流とは別の領域に求めることになる。いわば、観光客との相互行為が行われる「舞台」とは別に「楽屋」が確保されることになる。観光客からみると地域住民のありのままの日常生活と思われていた「田舎暮らし」は、地域住民にとっては観光客のまなざしにさらされる「舞台」であり、観光客のまなざしから撤退した「楽屋」という日常生活が別個に確保されている。「舞台」と「楽屋」というこうしたリアリティ分離は、地域住民の以下の声からうかがえる。

「現在、小言がでてるのが写真家が畑に入ること。『すみません、また今日も写真撮らせてください』と声をかける人もいれば、つんつんして傍若無人に作物を踏みつけて撮る人もいる。もうちょっと考えながら撮ってくれればいいと思う」(高柳町, 2000: 69)。(注釈: 観光客が観光客向けの「舞台」と勘違いして畑や作物という「楽屋」に足を踏み入れることに対する不満)

「まとまりが良すぎてよそ者を受け入れられないところがある」(同上: 113) (注釈: 地域住民同士で形成した「楽屋」が拡大し観光客向けの「舞台」を侵食)

「観光客が来るようになって家も離れているので、生活に対しての影響はあまり感じない」(同上: 117) (注釈: 地理的距離による「楽屋」と「舞台」の分離)

「[これからの高柳に対して] 外から来る人はいいですけど、住んでる人がもっと根付くようなまちづくり、あの様な施設もも

もちろん大事だけど、若い人が地元に残ってここに住んでみようと思うような町にしてもらいたい。」(同上：126；[] 内は筆者の補記)〔注釈：観光客向けの「舞台」よりむしろ地域住民の日常生活の場である「楽屋」の利便をはかるまちづくりをすべきという主張〕

「[高柳へ来る人へ]よその人が来て体験して、繰り返し来て、住んでくれればと思う。ただ人がいいし、いい町だからって来ると、『泣きを見るよ』って言いたくなる。ひどい人はポンと来てかき乱して帰った人もいるし。東京に行くと最初誰も助けてくれないよね。田舎だから助けてくれると思ったら間違い。自分達で付き合いの環境をつくっていかないと。いい人にならないと。」(同上：129；[] 内は筆者の補記)〔注釈：観光客が地域への定住を考えているなら、観光客向けの「舞台」と地域住民の日常生活である「楽屋」とを混同してはならないという主張〕

「じよんのび [じよんのび村] は町としては良かったかも知れない。地元において申し訳ないけどあんまり活用していない。たまに、温泉に入りに行くくらい。」(同上：132)

「[じよんのび村について] 親戚と一緒にたまに温泉を利用する。普段は豆腐や、がんもどきを買に行く程度。食堂は、家で食べるものとさほど変わらないし、料理の特徴もない。お金を出してまでそこに行こうとは思わない。町の人、それほど使っていないと思う。」(同上：131 [] 内は筆者の補記)

〔注釈：じよんのび村は、地域住民の「楽屋」というよりも主に観光客向けの「舞台」であるという指摘〕

「[じよんのび村の] 宿泊棟が出来たばかりの頃は、婦人会の活動でバザールをやった。その時には、買いにきた人たち（観光客）と、あまり会話はなかった。」(同上：130；[] 内は筆者の補記)〔注釈：「宿泊棟」という同じ場にありながら、「舞台」と「楽屋」の分離が維持されている〕

以上から、本章の結論として、観光客にとって魅力的な「田舎暮らし」を維持するために、地域住民が保持している生活意識とは、地域住民との相互行為という「舞台」と、本心を吐露できる日常生活という「楽屋」というリアリティの分離であることがわかる。

4. 果てしなく探求される地域住民のアイデンティティ

ここまでみてきたとおり、都市農村交流において地域住民は、観光客とコミュニケーションをする「舞台」と、本心を吐露できる日常生活という「楽屋」とにリアリティを分離することで、観光客の望む「田舎暮らし」を「舞台」上で維持、演出し、観光客から希少価値のある「田舎暮らし」の住民と承認されることによって、まちのアイデンティティ、地域住民としてのアイデンティティを獲得してきた。本章では、都市農村交流を通じて確立されるまちのアイデンティティ、地域住民のアイデンティティにはどういった特徴があるのかを考察する。

都市農村交流において地域住民は、都市住民を中心とする観光客が望む「田舎暮らし」を彼

らに提供しようと、まちづくりのなかで工夫と趣向を凝らしてきた。高柳町や足助町でも、それぞれ独自のまちづくりによって観光客に「田舎暮らし」を提供し、一定の成果をおさめてきた。ところが、観光客の「田舎暮らし」需要に对应しているはずのまちづくり、まちや地域住民のアイデンティティを獲得できたまちづくりに対して、地域住民自身が、いわば「虚偽」意識を感じていることが、以下の地域住民の声からうかがえる。

「足助中心の町並みについて。きれいはなってきたが、最終的にはその家に住んでいる人の美的センスによるので、全体として考えることは難しい。張りぼてのような町並みはおもしろくない。」(早稲田大学後藤春彦研究室, 1999: 53)

「狐の夜祭り¹⁰や YOU・悠・遊¹¹のようなイベントは、昔からあるものではない。時間をかけても残っているのが文化というなら、イベントも続けていって定着したときに次世代に残す価値というものが出てくると思う。初めだけにぎわってバブルみたいにはじけないような要素がまつりには不可欠だと思う。お金を掛けないと維持できないようなものであったら、ニセモノだということだ。大切なのは何で祭りを復活させようとしたか、その動機がある一部のもののためだったら消えてゆくと思うか、初めの人々の心や精神を祭りに込めて伝えてゆくなら、次世代に受け継がれると思う」(高柳町: 101)

「[これまでは観光産業を中心としたまちづくりに成功したが]しかし、これからは

今までのような『ハコモノ』作りの方法から脱したまちづくりが必要なのではないかと考えています」(同上: 62)

観光客の望む「田舎暮らし」を彼らに提供するためのまちづくり、まちや地域住民のアイデンティティを獲得できたまちづくりに対して、地域住民自身がこのような「虚偽」意識を感じているのはなぜだろうか。奥村(1998)によれば、人は、場にふさわしい自分、他者から望まれる自分、すなわち「きちんとした自分」であろうとして努力することがある。それはリスペクタビリティの希求である。人はリスペクタブルな自分であろうとして、自らのふるまいだけでなく感情をも統御、管理しようとする。たとえば、お葬式に参列したとき、たとえ悲しみの感情をもっていない場合でも、ひとは、あたかも悲しんでいるかのようにふるまうのみならず、本当に「悲しい」と感じようと努力し、しばしば実際に「悲しい」と感じるようになる。そして、ふるまいや感情の統御、管理することに成功すると、すなわち、「その場においてやらねばならないことをやすやすとできてしまう」「その場において感じなければならないことをやすやす感じるようになる」ことで、ひとは自らのふるまいや感情に「虚偽」の意識をもつようになる(奥村, 1998: 128-163)。都市農村交流において地域住民が、観光客の望む「田舎暮らし」を提供することで獲得してきた地域のアイデンティティに対して、そしてそのためのまちづくりに対して「虚偽」意識をもつことがあるのは、観光客の望むような「田舎暮らし」を、①まごころ(ホスピタリティ)、②ならわし(伝統的慣習)、③たたずまい(ムラの風景)の

「管理」や「統御」によって提供できてしまっていることに由来するのではないだろうか。

奥村（1998）によれば、人は、自らのふるまいや感情を統御、管理することに成功し、自らのふるまいや感情に「虚偽」意識をもつようになると、今度は「虚偽」意識から逃れようとして、統御、管理されない「本当の私」「自然な私」を探求しようとする。しかしながら、「本当の自己」「自然な自己」は、それが人為的に努力して求められる限り、最終的に獲得されることはない。人為的に努力して求められる「私」が「本当の私」「自然な私」であるはずがないからである。その結果、人はいわば「自然らしさ」「自分らしさ」の果てしない探求という循環のなかに入り込み、自らのアイデンティティについて常に不安を感じることになる（奥村、1998：128-163）。都市農村交流において「田舎暮らし」三要素を管理、統御することで獲得できた地域のアイデンティティに対して「虚偽」意識をもつようになった地域住民が、「自分らしさ」「本当らしさ」を探求する終わらない循環に入り込んでいる様子を以下から読み取ることができる。

「高柳らしい文化を掘り下げる必要がある。ぼう大な時間がかかるが、最後はそれで決まる。住んでいる人の意識が土着性を持ち、それが価値のあることだと認識する人を一人でも多く増やすことが大事」（高柳町、2000：16,63）

「じょんのび [じょんのび村] に対しては、外から見れば、他と違うものがあるように見えるかも知れないけど、当初のコンセプトに共鳴してきた側から見ると、いわ

ゆる観光地的なものに迎合的である。だから、もっとオリジナリティーをつくっていく必要があると思う」（同上：103）

「じょんのび [じょんのび村] の次っていうのは見つからないんじゃないの。何かを探している過程が村おこしだから、頂上にのぼっちゃったら目的がなくなってしまう。今後の方向っていうのが一番難しいけどね。高柳が存続していくことが大事」（同上：16）

「まちなみの保存に関しては、10年ぐらい前は本当にやっているのか疑問だったし、行政は残してくれというだけで政策がみえなかったため、『それで、一体残してどうするつもり？』と感じていた。でも、今は現在残ったものをどう利用するか、どう使っていくか考えるのは僕らの仕事であると思っている。いい資源を残してくれて感謝している。お客さんをお呼びするため、他とは違うまちづくりをするにはいい材料だから」（早稲田大学後藤春彦研究室、1999：63）

「物を展示することより、生きた山村の文化を伝えるという意味で三州足助屋敷は成功したと思うが、この頃はマンネリ化してきた。」（同上：53）〔注釈：まちづくりの成果である三州足助屋敷が「不自然」に思えてきた〕

「足助は見せ物なのかという議論も、もちろんかなりある。観光で成り立っているという現実もあるのでその辺りの兼ね合いは難しい。また、常に新しいものを生み出していかなくてはならないという観光行政に対する難しさもある。」（早稲田大学後藤春彦研究室、1999：60）

以上から、本章の結論としては、都市農村交流を通じて確立されるまちのアイデンティティ、地域住民のアイデンティティとは、「本当らしさ」「自然らしさ」を果てしなく探求する循環のなかで不安定なものであるといえる。

5. おわりに

以上見てきたように、日常的な生活空間を都市住民という観客を迎え入れる舞台とすることで、地域住民は演じることと、同時に舞台裏となる「楽屋」の領域が要請される。このように、都市住民と地域住民はお互いの役割を通じた関係によって成立しているといえるが、その役割は固定的なものであろうか。

本稿で対象とした、高柳町や足助町での事例では見る事が出来なかったが、視点を都市農村交流一般に広げてみると、都市住民と地域住民との相互関係が、長期的、緊密になった場合には、「演者」と「観客」の関係は固定的ではなくなる場合もある。

例えば、福島県伊達郡川俣町で展開された地域づくりインターン事業¹²の5年間の取り組みを、地域住民とインターン生とで総括した「交流座談会」¹³では、以下のような例が紹介された。当初、都会の大学生であるインターン生と向き合う時に、地域住民は、「自分たちの生活に、関心を持つのか、理解を得られるのか」といった不安を抱えていた。しかし、地域住民にとって当たり前な生活の出来事を、インターン生にひとつずつ繰り返し説明していく中で、彼らも「何も知らない」都会の若者であること、自分たちの生活に誇れる価値があることへの気づきの過程があったという。

ここでは「地域づくりインターン事業」とい

う都市農村交流の場が、地域住民にとっても自らの生活の価値を振り返る気づきの機会となっている。さらに、地域の生活を「教える地域住民」と「教えられるインターン生」という演じる役割の境界が曖昧になり、教えることを通じて、地域の生活の価値に「気づく地域住民」とその「触媒となるインターン生」という関係が読み取れるのではないか。（佐久間・図司・宮口、2006）

都市農村交流によって、地域住民は、彼らにとって日常的な生活空間に、都市住民という観客を迎え入れてきた。そのため、まちや地域住民のアイデンティティは、「本当らしさ」「自然らしさ」を果てしなく探求する不安定な循環のなかにあった。しかし、その一方で、その循環は、都市住民との価値の交換によって、自らが住まう新しい地域の価値に気づき続けるプロセス、まちや地域住民のアイデンティティを再定義し続けるプロセスであったともいえるのではないか。

また、都市住民という観客を迎え入れた結果、地域住民は、地域住民を「演じる」ことを要請され、また舞台裏となる「楽屋」の領域を確保しながら、絶え間のない努力によって、「地域」空間を構成し続けてきた。しかし、その関係は固定的ではなく、先の例で見たように長期間にわたる密接な関係になった際には、その役割の境界は曖昧になり、ともに価値を共有しあう互恵的な関係が構築されるのである。

[注]

- 1 総務省統計局『国勢調査報告』による。
- 2 例えば、宮口は「過去よりもかなり少数の人々によって、あらためて農山村の空間と自然を持続的に管理・活用する、生産・社会両面からの新しい技術論を打ち立てていく発想が大事」と指摘している。（宮口侗迪、1999）

- 3 基本目標として掲げられた「多極分散型国土の構築」のなかで、「定住と交流による地域の活性化」がうたわれている。
- 4 都市と地方の交流一般をさして、都市農山漁村交流という用語を基本としているが、冗長なため、本稿ではこれ以降「都市農村交流」として用いる。
- 5 グリーン・ツーリズムは、主に農村（農林水産省）で展開される長期滞在や生活体験を特徴とする観光形態をいう。他に漁村（水産庁）を中心としたブルー・ツーリズム、自然環境の体験（環境省）を中心としたエコ・ツーリズムなどがある。
- 6 たとえば、本庄宏行（2000）、斎尾直子（2001）、中島正裕（2001）などが挙げられる。
- 7 「じょんのび」とは、「寿命伸び」が語源といわれ、「ゆったりなびのびして芯から気持ちがいいという気持ちや状態」を表すこの地方の方言（後藤・佐久間・田口、2005：98-99）。
- 8 山上徹・堀野正人編『ホスピタリティ・観光事典』に記載されている「ホスピタリティ」の項をみると、「売り手側の立場を犠牲にした、やや一方的な顧客優先・優位という意味」を含む「サービス」とは区別されて、「ホスピタリティ」には「客と接客要員とは、感情的なつながり、信頼溢れる関係によって一味同心になるというかなり精神的なコンセプト」が含まれると説明されている。
- 9 もちろん、高柳の地域住民の特性のなかに所与としての「まごころ」が一切ないと言っているわけではない。観光客にとって魅力的な観光資源である「まごころ」を自覚的に提供しようという地域住民の意識にあくまでも焦点を合わせている。
- 10 「狐の夜祭り」とは、地域の人が多くの先進地の視察に出かけ、独自に始めたお祭り。毎年10月に、神話をもとに地域の人が狐に化けて幻想的な踊りをしている。村おこしとしても位置づけられるが、何よりも自分たちが楽しむために行われている。
- 11 「YOU・悠・遊」とは、豪雪地域という特性を活かした「雪と遊ぶ」冬季最大のイベント。雪像の創作やかまくら体験、紅白もちまき、巨大もちつきなどが行われている。
- 12 地域づくりインターン事業とは、大学生を中心とするインターン生が農山漁村に赴き、そこで2～4週間程度滞在し、生活しながら地域づくりに取り組む事業である。農作業体験などを含む都市農村交流のうち、都市住民としてのインターン生が長期に滞在することで、密接な相互関係が構築されるものである。詳しくは、（佐久間・図司・宮口、2006）を参照のこと。
- 13 2004年11月に開催された。
- 新潟県小国町を事例として」農村計画論文集（第2集）
- 門出かやぶき友の会、2006、『かわら版 かやぶきの里』第3号
- 宮口侗迪、1999、「相互刺激による価値の創造——交流の意義に関連して」農村計画学会誌 Vol17, No.4
- 宮口侗迪、1998、『地域を活かす——過疎化から多自然居住へ』大明堂
- 中島正裕、2001、「都市農村交流活動に対する住民の評価に関する研究——群馬県新治村を事例として」農村計画論文集（第3集）
- 奥村隆、1998、『他者といふ技法——コミュニケーションの社会学』日本評論社
- 斎尾直子、2001、「農村地域における住民の『集落外への外向きの姿勢』と『都市住民との交流効果』との連関——集落活性化と住民の定住意識向上につながる交流効果を視点として」農村計画論文集（第3集）
- 佐久間康富・図司直也・宮口侗迪、2006、「農山漁村の地域づくりにおける交流事業の役割——「地域づくりインターン事業」を事例として——」『早稲田教育評論』pp. 249-269
- 佐久間康富・矢部謙太郎、2005、「生産者と消費者の視点から見た『ファクトリー・ツーリズム』の可能性」『学術研究』（地理学・歴史学・社会科学編）早稲田大学教育学部、53
- 立川雅司、2005、「ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容」『村落社会研究 四十一集 消費される農村—ポスト生産主義化の「新たな農村問題」』
- 高柳町、2000、『高柳町地域づくりを振り返る——地域づくり十年の聞き書き』
- 早稲田大学後藤春彦研究室、1999、『まちづくり先進地レビュー講座 愛知県足助町 まちづくり軌跡と展望 資料集』
- 早稲田大学後藤春彦研究室・後藤春彦、2000、『まちづくり批評——愛知県足助町の地域遺産を読み』ピオシティ
- 矢部謙太郎・佐久間康富、2006、「消費社会論からみた『まちづくりオーラル・ヒストリー』」『学術研究』（地理学・歴史学・社会科学編）早稲田大学教育学部、54
- 山上徹・堀野正人編、2001、『ホスピタリティ・観光事典』白桃書房

【文献】

- 後藤春彦・佐久間康富・田口太郎、2005、『まちづくりオーラル・ヒストリー——「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く』水曜社
- 本庄宏行、2000、「都市農村交流活動の展開と住民意識